中学生の自己評価に及ぼす担任教師によるフィードバックの効果

樽 木 靖 夫*

EFFECTS OF CLASSROOM TEACHER'S FEEDBACK ON JUNIOR HIGH SCHOOL STUDENT'S SELF-EVALUATION

Yasuo TARUKI

Effects of positive and negative feedback on students' self-evaluation were investigated. Junior high school students were administered self-esteem scale, the Guess-Who-Test (class members nominations) and rating scales on self-confidence and self-evaluation relating to group behavior items. Then, class teachers gave each student positive feedback based on the peer ratings. The main results were as follows: (1) Though on the whole positive feedback had raising effects on self-confidence and self-evaluation, it was found larger for low self-esteem students than for high self-esteem students; (2) Additional negative feedback only to high self-esteem students did not lower their self-confidence and self-evaluation but roused their willingness to improve their behavior when they were convinced of the truth of negative feedback. Based on the above results, effects of positive and negative feedback on students' self-evaluation were discussed.

Key words: feedback, self-esteem, self-confidence, self-evaluation.

問 題

中学生の自己概念に関する研究(梶田, 1988; 加藤, 1977, 1987)は数多く報告されている。これらの研究には、主に、理想自己、現実自己のズレと適応(加藤, 1960; 菅, 1975)、自己受容と自己評価(梶田, 1975; 宮沢, 1988)、さらには友人を理想像として認知するという理想自己と友人評定の関係(岡田, 1987)を扱った問題などがある。これらは、自我に目覚める時期にある中学生にとって、両親・教師に代わって仲間との相互作用や自分なりの理想をもつことが重要であることを示している。

本研究は、中学生を対象とした教育場面を取り上げ、彼ら生徒による学級内行動への相互評価に関する教師によるフィードバック(伝達指導)が彼ら自身の行動等への自己評価に及ぼす効果を検討する。

古畑(1984)によると、矢作(1972)は、中学1, 2年生を対象として生徒の学習や道徳的行動に対する担任教師による評価をフィードバックし、その後の生徒の自己評価と教師評価の変化について検討した。それによると、フィードバックを行う実験群はそうでない統制群と比べて、教師と生徒のそれぞれの評価が類似するという仮説は認められなかった。

阿久根(1979)は、担任教師が児童・生徒それぞれの強い面、能力のある面、価値のある面を積極的に発見し意味づけをする positive focus の指導により、小学4年生ではスクール・モラル、教師のリーダーシップ行動の認知などにおいて有効な効果をみいだした。しかし、中学3年生ではそのような効果がみられなかった。

これら2つの研究では、生徒行動に対する教師からの評価をフィードバックしたが、中学生を対象とした場合、仲間との相互作用が重要である彼らの発達の特徴を考慮すると、教師評価よりもむしろ仲間からの評

* 横浜市立浦島丘中学校(Yokohama Urasimaoka Junior High School)

価を教師がフィードバックする方法について検討する必要がある。

樽木 (1990) は、上述した観点に基づき、教師評価に代えて学級内のソシオメトリック地位を規定する15の行動項目 (例えば、協調性・責任感・明朗性など) に関する仲間からの肯定的、否定的評価についての教師によるフィードバック (伝達指導) 効果を検討した。それによると、肯定的評価のみをフィードバックされた群は、スクール・モラル、教師のリーダーシップ行動に対する認知が有意に上昇した。これに対して、双方の評価をフィードバックされた群は教師のリーダーシップ行動のうち集団維持行動の認知が下降した。

この結果は、仲間からの評価が教師評価よりも中学生にとって重要な意味をもつことを示唆している。しかしながら、この知見は、実験が3か月の長期間に渡りフィードバック以外の影響も考えられるので、フィードバックの直接的な効果を短期間の実験によって検討することが課題として残された。本研究はこれを第1の問題とする。

他方、このような他者からの評価を用いたフィードバック効果における個人差をもたらす帰属作用として、自尊感情のレベルが重要であることが知られている (中村, 1978 ; 長田, 1977)。Jones (1973) によれば、被験者が第三者に情報を伝達される場合、その反応は自尊感情理論 (self-esteem theory ; Dittes, 1959 ; Walster, 1965) に従うとされている。

しかしながら、これまでの研究は自尊感情のレベルが実験的に操作された場合を扱ったものであり、個人特性としての自尊感情のレベルを問題にした場合の研究が求められる (蘭, 1986)。本研究は、第2の問題として、仲間からの評価のフィードバックに対する被験者の反応が自尊感情理論に沿うかどうかを検討する。ここでいう自尊感情とは、自己をどの程度肯定的に価値あるものとみなしているかということである。

ところで、自尊感情のレベルと否定的評価のフィードバックに関しては、質問紙による自己評定と観察による他者評定により自尊感情のレベルのタイプ分けを行い、学習課題を用いて失敗課題の対処について検討した井上 (1986) の報告が参考になる。これによると、課題試行後にどの課題をもう1度やりたいかという問いに対し、自他評定ともに高自尊感情群は失敗課題の選択数が多く、失敗課題への構えも積極的で、失敗を成功に変えようとする構えが顕著であった。これに対して、低自尊感情群は成功課題を反復しやすく、たとえ失敗課題を選択してもそれを成功に変えようとする

姿勢はみられなかった。この報告は、劣等感の補償による高得点や高い要求水準による低得点の混入を避けるため、質問紙による自己評定と担任教師の観察による他者評定を併用したことが特徴である。また、この報告は学習課題を用いたが、対人認知の課題においても否定的評価内容への対処につき検討することを示唆するものであり、これを本研究における第3の問題とする。

このとき本研究のようなフィードバック効果を検討するためには、Moretti & Higgins (1990) がすでに指摘しているように、フィードバック内容の心理的インパクトが重要であり、それを考慮する必要がある。

本研究は、中学生の対人関係を円滑にする指導方法を求める立場から、さきの考察から導き出された次の4つの仮説に基づき、ソシオメトリック地位を規定する15の行動項目に関する生徒相互の肯定的、否定的評価の教師によるフィードバック (伝達指導) が生徒の自信やさきの行動への自己評価に及ぼす効果を検討する。ここでいう生徒の自信とは彼らの自尊感情を構成する主要因であり、意見表明、課題遂行、指導性の発揮の3場面に関する自信を指す。

- (1) 肯定的評価のフィードバックが行われると、被験者は自信や行動への自己評価を上げるであろう。
- (2) 肯定的評価のフィードバックが行われると、自尊感情のレベルの低い群が高い群に比べて自信や行動への自己評価を高めるという自尊感情理論に沿った反応を示すであろう。
- (3) 肯定的評価の後に否定的評価がフィードバックされた自他評定ともに高自尊感情群は、否定的評価のフィードバック前後の比較において、自信や行動への自己評価を下げないであろう。
- (4) インパクトのある否定的評価のフィードバックをされた者は、否定的に評価された行動を改善しようとする構えをみせるであろう。

方 法

1. 測定尺度

(1) ゲス・フー・テスト

ゲス・フー・テストは、諸報告 (橋本, 1958 ; 長島ら, 1955 ; 河井ら, 1984 ; 松山, 1964) から、ソシオメトリック地位の重要な規定要因として明らかにされた15の行動項目で構成された。具体的には、協調性、誠実性、公正さ、能力、根気強さ、公共心、規律性、責任感、指導性、自主性、明朗性、社交性、ユーモア、親切、寛容性の項目である。これらの項目につき、学級内において肯

定的、否定的に評価される生徒を各々5名以内で回答させた。

(2) 自尊感情尺度と自尊行動尺度

遠藤ら(1974)、根本(1972)、Rosenberg(1965)の自尊感情尺度および梶田(1988)の自己評価的意識の尺度を参考に、7つの中学校生活場面に即して構成された27項目(4段階評定)の自尊感情尺度(近藤, 1990)を用いた。また、自尊行動尺度は、井上(1986)を参照した、「自信・確信の表明」「失敗事態下での行動」など9領域の観察に関する担任教師による5段階評定である。

(3) 自信尺度と生徒行動の自己評価

自信尺度は近藤(1990)の自尊感情尺度のうち、「自信」の因子に関する項目を参考に、意見表明、課題遂行、指導性の発揮の3場面についての一般的な自信を測定する目的で作成した4段階評定の質問紙である。具体的には、意見表明では「他の人の発言と違った考えを持っているときでも自信を持って自分の意見を発表することができますか」など5項目、課題遂行では「結果の善し悪しとは別に、自分では良く取り組んだという自信をいつも持っていますか」など3項目、指導性の発揮では「ものごとに取り組むとき自分がリーダーになったら、クラスをうまくまとめて行けると思えますか」など2項目で構成した。また、生徒行動の自己評価は、さきの15の地位規定に関する行動項目につき、現在そのような行動をどの程度とっているのかの5段階評定の質問紙。

2. 手続

実験期間は1990年6～7月であった。まず、学級ごとにゲス・フー・テストを実施した。次いで、個人面談時に、各担任教師(実験協力者)は、被験者全員に、さきのテストによる肯定的評価をフィードバック(PF)した。さらに2週間程度の間隔をおき、自己評定と担任教師による他者評定ともに自尊感情のレベルが高い被験者にのみ否定的評価をフィードバック(NF)した。ここで、フィードバック内容は、担任教師が、ゲス・フー・テストの結果に基づき、当該被験者の行動を考慮して妥当と判断できる1, 2の項目を被験者ごとに別個に選んだ。また、フィードバックのしかたは、被験者自身に思い当たることを話してもらったり、担任教師が想起できる具体的事例を伝えながら行った。このとき本研究のようなフィードバック効果を検討するためには、被験者自身にとってフィードバック内容が重要な事柄であることが必要であり、それを考慮するために、フィードバック直後に、その内容が各被験者にそれぞれ思い当たる場面があるかを2件法で回答させること

により、フィードバックの妥当性を調べた。あわせて、フィードバックされた内容を実際の生活にどう活かそうとするかを文章記述させ、フィードバックによるインパクト測定とした。

従属変数となる自信、生徒行動の自己評定の測定は、肯定的評価のフィードバック前、直後、そして1週間後、さらに否定的評価のフィードバック直後、1週間後にそれぞれ行った。

3. 被験者

中学1～3年生の計7学級、男女あわせて234名を対象として肯定的評価をフィードバックし、各測定に欠席のない1年生69名、2年生62名、3年生94名を分析の対象とした。

結 果

1. 自尊感情尺度と自尊行動尺度

自尊感情尺度は、項目分析により総合点と関連の低い4項目を除いた23項目の合計(理論上23～92点に分布)を自尊感情得点とし、これを独立変数とした。この23項目について因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った(TABLE 1参照)。これより、自尊感情尺度は3因子で構成されており、それは自信に関する第1因子、自他比較に関する第2因子、自己主張に関する第3因子であり、この23項目での自尊感情尺度の信頼性係数は0.78であった。

TABLE 2 被験者の自尊感情得点

学年	性別	N	$\bar{X}$	S.D.
1年	男子	34	54.47	9.38
	女子	35	52.03	7.45
2年	男子	27	56.96	6.90
	女子	35	53.94	7.32
3年	男子	51	53.08	7.08
	女子	43	50.23	8.30

この自尊感情得点の学年、性別ごとの平均がTABLE 2に示されている。2要因の分散分析を行ったところ、学年($F(2,219)=4.22, p<.05$)、性別($F(1,219)=6.67, p<.05$)の主効果がそれぞれ有意であり、交互作用はみられなかった。学年についてLSD法による多重比較の結果、2年生と3年生の間において有意に差がみられた($MSe=62.13, p<.05$)。

自尊行動尺度について無作為抽出1学級の当該学級担任と学級担任外実験協力者との評定一致率は0.66であり、9領域の評定合計を自尊行動得点とした。自尊感情尺度と自尊行動尺度の相関は0.24と低く、教師と生徒の自尊感情に関する認知に違いがみられる。このため、否定的評価のフィードバックには安定した高い自尊感情の被験者を抽出するために、井上(1986)にしたがい、両尺度を併用することとした。

2. 肯定的評価のフィードバック効果

TABLE 1 自尊感情尺度に関する因子分析の結果

項目	質	問	項	目	因子1	因子2	因子3	共通性
因子1 基本的な自信に関する因子 (因子寄与率 20.68%)								
22	クラスの代表などに選ばれたことはなくても、自分にはリーダーになれる能力があると思いますか				0.744	-0.098	-0.050	0.565
19	文化祭や体育祭で自分がリーダーになったら、クラスをうまくまとめて行けるとと思いますか				0.719	-0.108	-0.158	0.554
14	学級会などでの自分の発言には、ほとんどの場合みんなが賛成してくれるように思いますか				0.678	0.111	-0.116	0.486
25	あなたは、あなたのまわりの人達がいつかあなたのことを賞賛し、尊敬するようになると確信していますか				0.644	-0.057	-0.007	0.419
9	あなたは、異性に対して自分が魅力的であるかどうか気になりますか				0.589	0.131	0.265	0.434
6	生徒会や委員会などでたいいの人がやれる程度のことは、自分にも十分にできると思いますか				0.579	0.035	-0.145	0.358
13	あなたは、どんな時も自分の心を素直に表現できるという自信がありますか				0.557	0.037	-0.088	0.319
5	あなたは自分の容姿に自信をもっていますか				0.557	0.127	-0.162	0.352
12	クラスで何かの代表を決めるような時、あなたは自分が選ばれるような気がしますか				0.544	0.058	0.047	0.302
2	部活動やクラブ活動で、いつかは良い成績を残せるだろうという確信を持っていますか				0.509	0.019	0.051	0.262
1	テスト結果の善し悪しとは別に、授業内容の理解は、良い方だという自信をいつも持っていますか				0.500	-0.016	-0.297	0.338
因子2 自己比較に関する因子 (因子寄与率 14.66%)								
7	あなたは、他の人と比べて失敗や小さなミスをいつまでもよくよく考える方だと思いますか				-0.043	0.725	-0.055	0.531
11	テストの成績が以前より上がっていても、他の人と比べてやっぱり自分はだめなんだなあと思うことがよくありますか				-0.057	0.675	0.115	0.472
18	テスト結果を気にするあまり、自分ではんでだめだと自信を失うことがありますか				-0.042	0.663	0.046	0.443
10	運動会など大勢の前で何かする時、あなたは取り乱したり、まごついたり（あがったり）して、実力が発揮できないことがよくありますか				0.081	0.637	0.053	0.415
16	あなたは、まわりの人と比べて、自分の体格や容姿をはずかしいと思ったことがありますか				0.080	0.501	0.368	0.393
20	あなたが知っている大部分の人々に比べて、自分の方が劣っていると感じるようなことはありますか				0.052	0.499	0.378	0.394
3	他の人があなたと一緒にいることを好んでいるかどうかについて、あなたは気にしますか				0.184	0.428	0.181	0.251
因子3 自己主張に関する因子 (因子寄与率 6.15%)								
17	部活動やクラブ活動で、自分よりもうまい人が自分と違う意見を主張しても、すぐに認めたりせず、自分の意見を押し通すことができますか				0.438	0.161	-0.637	0.624
26	クラスで話し合いをしている時、自分が意見を持っても他の人が自分と違った意見をのべると、すぐに自分の意見を変えてしまう方ですか				-0.010	0.220	0.617	0.429
21	授業中に何かを発表する場合、クラスの人にどう思われているかが気になってうまく発言できないことがありますか				0.110	0.289	0.608	0.465
4	授業中に、他の人の意見と違った考えを持っている時でも、自信をもって自分の考えを発表することができますか				0.395	0.068	-0.570	0.486
23	部活動やクラブ活動に対して不満があっても、自分の意見を堂々と言えないことが多いですか				-0.133	0.217	0.431	0.251

(1) 自信、自己評価の変容

被験者全体の自信、自己評価得点の平均が TABLE 3 に示されている。自信得点は項目分析により総合点と関連の低い1項目を除いた9項目の合計（理論上9～36点に分布、信頼性係数0.80）、自己評価得点は生徒行動の自己評価15項目の合計（理論上15～75点に分布、信頼性係数0.83）を用いた。肯定的評価のフィードバックは、ゲス・フー・テストによる生徒行動項目のほぼ全項目が用いられた。

自信得点につき、3要因混合（学年要因×性別要因×調査時期要因）の分散分析を行ったところ、1つの交互作

用（学年×調査時期）のみが有意傾向にあった（ $F(6,657)=2.08, p<.10$ ）。下位検定の結果、1年生では実験前とPF後、PF後とPF1週間後、3年生では実験前とPF後、実験前とPF1週間後、実験前と終了時の間においてそれぞれ有意差がみられた（ $MSe=5.00, p<.05$ ）。しかし、2年生では変化がなかった。

また、自己評価得点についても3要因混合の分散分析を行った結果、性別の主効果（ $F(1,218)=9.64, p<.01$ ）と学年×調査時期の交互作用が有意であった（ $F(6,654)=3.32, p<.01$ ）。下位検定によると、1年生では実験前とPF後、実験前と終了時、PF後とPF1週間後、2年生で

TABLE 3 被験者全体の自信、自己評価得点

調査時期		自信得点			自己評価得点		
		N	$\bar{X}$	S.D.	N	$\bar{X}$	S.D.
1年男子	実験前	34	24.15	4.72	34	49.85	7.04
	PF 後	34	24.41	5.43	34	52.74	9.50
	PF 1週間後	34	23.82	5.02	34	50.59	9.99
	実験終了時	34	24.15	5.09	34	51.76	10.65
1年女子	実験前	35	22.97	3.70	35	53.97	6.75
	PF 後	35	24.26	4.24	35	56.74	8.25
	PF 1週間後	35	23.00	4.02	35	55.49	6.92
	実験終了時	35	23.51	4.06	35	55.49	7.89
2年男子	実験前	27	22.78	5.22	26	46.69	7.80
	PF 後	27	22.78	4.71	26	50.27	7.63
	PF 1週間後	27	22.59	4.94	26	47.58	8.16
	実験終了時	27	23.52	5.50	26	47.88	8.92
2年女子	実験前	35	22.91	4.01	35	49.97	8.23
	PF 後	35	23.31	3.58	35	53.40	7.53
	PF 1週間後	35	22.97	4.87	35	52.03	9.19
	実験終了時	35	23.09	5.08	35	53.71	9.15
3年男子	実験前	51	22.10	4.45	51	48.55	7.38
	PF 後	51	23.20	4.18	51	51.61	8.39
	PF 1週間後	51	24.03	4.76	51	52.90	9.44
	実験終了時	51	23.59	5.06	51	52.18	10.09
3年女子	実験前	43	20.19	3.84	43	49.56	7.01
	PF 後	43	21.63	3.96	43	52.63	7.81
	PF 1週間後	43	20.74	4.18	43	53.95	8.01
	実験終了時	43	21.44	4.57	43	54.47	7.47

は実験前と PF 後, 実験前と PF 1週間後, 実験前と終了時, PF 後と PF 1週間後, 3年生では実験前と PF 後, 実験前と PF 1週間後, 実験前と終了時の間においてそれぞれ有意差がみられた ($MSe=18.74, p<.05$)。

したがって, 実験前より PF 後において, 自信得点については, 1, 3年生で, 自己評価得点においては各学年とも有意に上昇し, 仮説(1)は, ほぼ支持された。なお, 実験終了時にみられる自信, 自己評価得点の上昇は, 調査直前に学期末の個人面談が行われた影響も考えられるので以後の分析から除く。

なお, 2年生男子1名が生徒行動の自己評価に記入漏れがあり自己評価得点の検討対象から除外されている。

(2) 自信, 自己評価の変容と自尊感情の関係

自己評定による自尊感情得点の上位・下位それぞれ25%を基準とした自尊感情高群57名, 自尊感情低群61名のうちフィードバックに思い当たることがあったとする者が対象とされ, 自尊感情高(H), 低(L)群それ

ぞれ38名であった。自尊感情得点の平均(S.D.)は, H群63.13(5.06), L群44.05(4.98)であった。

TABLE 4には両群の自信, 自己評価得点の平均が示されている。自信得点に関する2要因混合(自尊感情要因×調査時期要因)の分散分析により, 交互作用に有意傾向がみられた($F(2,148)=2.39, p<.10$)。単純効果の検定より, L群では実験前, PF 後, PF 1週間後という調査時期において有意な差がみいだされた($F(2,148)=9.16, p<.01$)。しかしながら, H群では有意な差がみられなかった($F(2,148)=1.31, n.s.$)。

さらに, L群につきLSD法による多重比較の結果, 実験前とPF 後, 実験前とPF 1週間後の間においてそれぞれ有意な差がみられた($MSe=4.41, p<.05$)。よって, L群においてのみ自信の上昇が認められた。

つぎに, 自己評価得点に関する2要因混合(自尊感情要因×調査時期要因)の分散分析により, 自尊感情要因($F(1,73)=22.44, p<.01$), 調査時期要因($F(2,146)=7.72, p<.01$)にそれぞれ主効果がみられた。しかし, 交互作用はみられなかった($F(2,146)=1.52, n.s.$)。これより, 自己評価得点に関しては, 自尊感情理論を支持するものではなかった。

なお, H群のうち先述の通り自己評価に記入漏れのある2年生1名は自己評価得点の分析より除外された。

以上より, 仮説(2)は, 自信の変容では支持されたが, 自己評価の変容では支持されなかった。

3. 否定的評価のフィードバック効果

(1) 自信, 自己評価の変容

否定的評価のフィードバックを行うために, 自己評定による自尊感情得点, 他者評定による自尊行動得点ともに上位25%を基準とした19名について, 担任教師との協議の上, 否定的評価のフィードバック項目が妥当であると判断された16名の生徒をフィードバックの被験者とした。このうち, 肯定的評価, 否定的評価のいずれにも思い当たる場合があるとする11名をHH群の分析対象とした。否定的評価のフィードバックは, ユーモア項目の使用率(43.7%)が最も高く, 「君が冗談など余り言わないと思っている人がいるが, 冗談の1つぐらい言ってもいいんじゃないか」などとフィードバックされた。

HH群の自信, 自己評価得点の平均がTABLE 5に示されている。1要因被験者内(調査時期要因)の分散分析を行った結果, 自信得点は, 調査時期要因について主効果がみられなかった($F(3,30)=0.80, n.s.$)。

つぎに, 自己評価得点も, 調査時期要因について主効果がみられなかった($F(3,30)=1.09, n.s.$)。

したがって、HH 群は否定的評価のフィードバックにもかかわらず、自信、自己評価得点がともに低下せず、仮説(3)は支持された。

(2) 否定的評価のフィードバックに対する構え

否定的評価のフィードバックされた内容を実際の生活にどう活かそうとするかを文章記述させたインパクトの測定より、フィードバックの内容に思い当たる場面があるとする群とないとする群のそれぞれにおいて、この回答から自己の行動について改善する意志があるかどうかを分類し、その結果を TABLE 6 に示した。直接確率計算の結果、人数の偏りには有意傾向であった ($p=0.07$)。つまり、思い当たる場面があるとする群においては改善の意志がみられるものが多く、そうでない場合には改善の意志がみられないものが多いことが明らかとなった。これより、仮説(4)は支持された。

TABLE 4 H, L 群の自信、自己評価得点

自尊感情	調査時期	自信得点			自己評価得点		
		N	$\bar{X}$	S.D.	N	$\bar{X}$	S.D.
H 群	実験前	38	26.18	3.42	37	55.03	6.39
	PF 後	38	26.89	2.93	37	56.57	7.46
	PF 1 週間後	38	26.26	3.69	37	55.70	7.01
L 群	実験前	38	18.45	3.08	38	46.55	6.19
	PF 後	38	20.47	3.67	38	49.63	7.62
	PF 1 週間後	38	19.79	4.04	38	49.26	8.40

TABLE 5 HH 群の自信、自己評価得点

調査時期	N	自信得点		自己評価得点	
		$\bar{X}$	S.D.	$\bar{X}$	S.D.
実験前	11	27.45	3.87	55.82	8.36
PF 後	11	26.91	3.92	55.55	7.46
PF 1 週間後	11	26.55	3.85	54.82	6.58
NF 後	11	26.64	3.77	57.55	6.02

TABLE 6 否定的評価のフィードバックに対する構え

行動 \ NF に	思い当たる	思い当たらない
改善の意志あり	9	1
改善の意志なし	2	4

考 察

本研究で見いだされた自尊感情尺度の 3 因子は、梶田 (1988) の自己評価的意識の 4 側面に対応していると考えることができる。つまり自信に関する第 1 因子では、項目 22、6 などは「梶田の①さまざまの自己評価

的感覚や意識・態度を最も基底において支えている基盤的な感情や感覚」に、項目 25、13 などは「③自分自身についての要求水準や理想的の自己のイメージに照らして自分の現状を見ることで成立した自己評価的意識や感覚」に対応した項目で混成された因子と考えることができる。つぎに自他比較に関する第 2 因子は、「②自分の周囲にいる人や自分の内面で想定した人との暗黙のうちに比較対照することで成立した自己評価的感覚や意識」、自己主張に関する第 3 因子は、「④自己評価的な感覚や意識の外的現れとしての態度や行動特性」にそれぞれ対応した項目で構成された因子と考えることができる。

本被験者の自尊感情得点について、学年差、性差がみられた。性差については、すでに菅 (1975) が指摘しているように、男子が女子に比べて高かった。学年差については 2 年生が 3 年生よりも高いが、これはごく限られた被験者であり、発達差というよりは本被験者の特徴をあらわしたものと考えられる。

本研究は、短い実験期間を設定することで、直接的なフィードバック効果を検討した。担任教師が生徒相互による肯定的評価をフィードバックした結果、自信得点は 1・3 年生において、自己評価得点は各学年においてそれぞれ上昇した。このような自信、自己評価得点の増加は、樽木 (1990) でみられたスクール・モラルの上昇につながると考えられる。また、中学生を対象としたとき、先行研究ではみられなかった教師評価のフィードバック効果に代わって、仲間からの評価に関する教師によるフィードバック効果が認められたといえる。つまり、これは中学生にとって仲間からの評価が心理的に重要な意味をもつことを改めて示唆するものである。2 年生では自信得点の上昇がみられなかったが、これは先述のように彼らの自尊感情が高かったことから、自尊感情理論を支持するものと考えられる。自己評価得点について性差がみられ、女子の平均が男子より高かった。これは、自己評価尺度が道徳的な行為についての行動項目で構成され、梶田 (1988) が述べているように、女子の場合の自己評価的意識は周囲のまなざしに敏感なためではないかと考えられる。

自己評定による自尊感情のレベルと肯定的評価のフィードバックの関係について、自信の変容は自尊感情のレベルの低い群が高い群に比べて自信を高め、これは自尊感情理論に沿うものであった。しかし、自己評価に関してはそのような傾向はみられなかった。それは、自己評価尺度が具体的な行動に基づいた測定項目であったため仮定された変化が生じにくかったと考

えられる。

本実験は実際の中学生の仲間関係の情報を扱っているため、仲間からの否定的評価のフィードバックを慎重に扱う必要があり、否定的評価をフィードバックされた低自尊感情群を比較群として設定しなかった。これは、実験計画上不適切な処置ではあるが、倫理的な観点から、このような計画にならざるをえなかった。以上のような限定された条件下での検討ではあるが、自他評定ともに高自尊感情群は、肯定的、否定的評価の双方のフィードバックが与えられても、自信、自己評価得点は影響されなかった。さらに、否定的評価のフィードバック内容について思い当たることがある場合、自分のその行動を改善する意志があったとした。このことは、高自尊感情群の被験者は自分自身に対して自信をもっており、思い当たることがある否定的評価を取り入れ自己の行動改善に活かすことで、さらに高い自尊感情を維持しようとすることを示唆している。井上(1986)は学習課題を用いて、高自尊感情群は失敗課題への積極的な対処と失敗を成功に変えようとする構えをみせることを明らかにしたが、この知見が学習課題の範囲にとどまらず、学級集団行動における対人認知の課題にまで拡張されたといえる。

本研究のようなフィードバック(伝達指導)を行うことで、教師は生徒行動の変容をどう捉え、教師自身どのように変わったのであろうか。担任教師との面接により、7つの実験学級中5学級の担任教師は、「フィードバック前にはぼんやりとした印象しかもたなかった生徒について、フィードバック後には印象が明確となり、正確に捉えきれようになった」と回答している。担任教師はそれまで必ずしも正確にはそれぞれの生徒を認知していなかったが、生徒相互の評価情報やその伝達指導によってより明確に把握することができるようになったと考えられる。そのことが担任教師に生徒個々に対して以前よりも正確な理解を深めさせ、諸種の観点から対応させることで、さきのフィードバック効果がみられたといえよう。

この推測に関して直接的な検討は加えられなかったが、本研究で用いた方法によってさきに述べたような教師に及ぼす効果が期待できるなら、この伝達指導はperson positivityの効果(蘭, 1990)につながると考えられる。教育場面においては、教師が生徒相互の肯定的あるいは否定的評価を彼ら一人ひとりに肯定的な意味があるように伝達指導することで、教師と生徒の信頼関係や日常的教育活動が支えられている。今後は、教師と生徒の相互作用における両者のそれぞれの認知の

変容過程に注目した研究が必要である。

引用文献

- 阿久根 求 1979 Positive focus の効果 大分大学教育学部紀要, 5, 107—119.
- 蘭 千壽 1986 自尊感情と好意 対人行動研究会(編) 対人行動の心理学 誠信書房 147—153.
- 蘭 千壽 1990 パーソン・ポジティヴィティの社会心理学 北大路書房
- Dittes, J.E. 1959 Attractiveness of group as function of self-esteem and acceptance by group. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 59, 77—82.
- 遠藤辰雄・安藤延男・冷川昭子・井上祥治 1974 Self-Esteem の研究 九州大学教育学部心理学部門紀要, 18, 53—65.
- 古畑和孝 1984 教師—生徒間のコミュニケーション 2, 3 の問題 辻村 明・水原泰介(編) コミュニケーションの社会心理学 東京大学出版会 61—77.
- 橋本重治 1958 GUESS-WHO TEST の研究 財団法人応用研究所
- 井上信子 1986 児童の自尊心と失敗課題の対処との関連 教育心理学研究, 34, 10—19.
- Jones, S.C. 1973 Self and interpersonal evaluations: Esteem theories versus consistency theories. *Psychological Bulletin*, 79, 185—199.
- 梶田毅一 1975 青少年の内面的成熟過程に関する検討 —自己成長性の発達状況をめぐって— 青年の内面的成熟に関する研究(文部省教育研究開発委嘱調査研究報告書) 教育の成果分析研究会 7—37.
- 梶田毅一 1988 自己意識の心理学(第2版) 東京大学出版会 94—119, 176—206.
- 加藤隆勝 1960 自己意識の分析による適応の研究 心理学研究, 31, 53—63.
- 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造 心理学モノグラフ, 14, 日本心理学会(東京大学出版会)
- 加藤隆勝 1987 青年期の意識構造 —その変容と多様化— 誠信書房
- 河井芳文・中村享史・神原高之・多羅沢守・青山祐子・保坂 操・保坂早苗・田中克昌 1984 児童におけるソシオメトリの選択, 及び排斥の理由とその分類 東京学芸大学紀要, 36, 49—58.

- 近藤一紀 1990 能力の自己評価に関する研究 上越教育大学学校教育学部卒業論文（未公開）
- 松山安雄 1964 学級における社会的地位と行動特性の研究 大阪学芸大学紀要, 5, 12—24.
- 宮沢秀次 1988 女子中学生の自己受容性に関する縦断的研究 教育心理学研究, 36, 258—263.
- Moretti, M.M. & Higgins, E.T. 1990 Relating self discrepancy to self-esteem. : The contribution of discrepancy beyond actual-self ratings. *Journal of Experimental Psychology*, 26, 108—123.
- 長島貞夫・中野佐三・田中熊次郎・斉藤定良・中村陽吉 1955 行動特性の変容条件としての社会的役割 日本心理学会第19回大会発表論文集, 125.
- 中村陽吉 1978 対人場面の効果 末永俊郎編 講座社会心理学 2 集団行動 東京大学出版会 51—83.
- 根本橋夫 1972 対人認知におよぼす Self-esteem の影響 (I) 実験社会心理学研究, 12, 68—77.
- 岡田 努 1987 青年期男子の自我理想とその形成過程 教育心理学研究, 35, 116—121.
- 長田雅喜 1977 親和性と好意性 水原泰介(編著) 講座社会心理学 1 個人の社会行動 東京大学出版会 91—132.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton : Princeton Univ. Press.
- 菅 佐和子 1975 Self-esteem と対他関係に関する一研究 教育心理学研究, 23, 224—229.
- 樽木靖夫 1990 学級集団行動に及ぼすフィードバック効果(1) 日本教育工学会研究会報告集, JET90—3, 15—22.
- Walster, E. 1965 The effect of self-esteem on romantic liking. *Journal of Experimental Social Psychology*, 1, 184—197.
- 矢作富美子 1972 教師から生徒へのフィードバックの生徒の行動の変化に及ぼす影響 国際基督教大学教授会提出学士論文（未公開）

付 記

本論文は、上越教育大学大学院平成2年度修士論文の一部を加筆修正してまとめたものです。本論文作成にあたり、上越教育大学 蘭 千壽助教授に御指導、同大学 遠藤由美講師に御助言を賜りました。深く感謝いたします。そして、本実験に協力して下さった片瀬 勝、木村昭雄、須賀一輝、加賀谷 護、加藤 哲、岩倉由佳、村田文之の各先生方と生徒の皆さんに御礼申し上げます。

(1991年9月2日受稿)